法城山　高圓寺　　(由緒)

高圓寺は八幡村字志川にあり、釈迦如来を本尊とし、脇侍に文殊・普賢の両菩薩が祀られている。現在の宗派は曹洞宗であるが、長元年間(一〇二八～一〇三七)に浄活阿弥真光寺入道によって八幡村青木に開創された当時は、真言宗を宗派とする紀州(和歌山県)高野山金剛峰寺の末となり、「神明山高縁寺」と称していた。

　後に、真言密教を深く信仰していた崇徳天皇が、大冶四年(一一二九)に「勅願」により、埴科郡式内中村神社の本殿を造らせ、また、高縁寺の七堂伽藍及び下寺三十六坊を建造した後、「天下太平・武運長久」を祈念させるべく、川中島十三ヶ寺の首山と定めた。また、国主からも佛供料として千貫文の土地を贈られ、隆盛を極めることになる。寿永二年(一一八三)川中島へ出兵した源義仲(木曽義仲)が、源氏の武士を集めるために八幡村八幡宮へ祈願した後に、当山に本陣を置き、横田河原の合戦に赴き、勝利を得たことにより、当山へ千曲川辺の相応の地を寄進している。しかし、永享八年(一四三六)村上氏と小笠原氏の戦は容易に終結を見ぬばかりか、兵火に包まれ、寺の建物は殆ど焼き尽くされたが、行基作の薬師仏一躰と総門だけが奇跡的に喪失を免れている。

　だが、廃墟となった寺の有様を見捨てられない信徒達は、僅かに焼け残った建材を集め義仲からの寄進地へ移築し、「千隈山」と改号して辛うじて寺の存続を成し得たのである。天文二十一年(一五五二)安曇郡獄下村青原寺の開山・重加和尚の法弟に当たる、天恕正樹和尚が当山の住職になり、建物を増築し、宗派を曹洞宗に改め、且つ、清原寺の末寺としたが、後に六世還化してより清原寺七世の肉弟である見性寺の春外潤鉄和尚が住職となり、以後見性寺(千曲市上山田新山)の末寺となる。

　寛永十三年(一六三六)と、延宝四年(一六七六)の水害で寺は失われたために、現在地へ移転され、寺の名称も、「水は去り土と成る」の意味を込めて、「法城山高圓寺」と改まり寺の再建工事も安永三年(一七七四)までに終了している。

　また、弘化四年(一八四七)の善光寺大地震、同年七月の落雷などの相次ぐ災禍の中で薬師如来・総門は辛うじて災禍を免れ、震災後四十余年の間に寺の建物も再建され、今日に至っている。

(信濃寶鑑)